

地球科学の魅力を伝える - IODP 第312航海への科学コミュニケーターの参加

Some Challenge of Communicating Geoscientific Research: Participation of Science Communicators in IODP #312

櫻井 英雄 [1]; 竹内 恵 [1]; 川村 善久 [2]

Hideo Sakurai[1]; Kei Takeuchi[1]; Yoshihisa Kawamura[2]

[1] 日本科学未来館; [2] 海洋機構

[1] National Museum of Emerging Science and Innovation; [2] JAMSTEC

深海底の科学掘削計画 IODP(Integrated Ocean Drilling Program) は、2005年7月の地球深部探査船「ちきゅう」の完成により、日本が米国と共に国際的なリーダーシップをとる新しいステージに入った。日本科学未来館では、地球科学の最先端研究をリードするIODPの活動に注目し、展示、イベント、ウェブ等で一般社会に向けて教育・普及活動を展開している。

2005年11月のIODP第312航海「高速拡大海嶺で形成された上部海洋地殻の貫通」(パナマ沖)に、日米の科学コミュニケーターが参加し、JOIDES Resolution号の船上から深海掘削研究の生の現場をレポートした。この試みは、日米科学技術理解増進の専門家会合のプロジェクトとして、米国JOI(Joint Oceanographic Institutions)、海洋研究開発機構との連携で実現したものである。船上での活動は48日分の日記として、未来館ホームページ上の特設サイト(<http://www.miraikan.jst.go.jp/j/sp/jr312/index.html>)で公開されている。研究者と一般社会の間をつなぐ科学コミュニケーターの視点から、深海掘削の現場をリアルに伝えている。また、TV会議システムを使い、船上と未来館展示フロアをつなぐイベントを試験的におこなった。事後のアンケート結果からは、参加者の地球科学に対する興味の深まりが読み取れた。

今後、理科教員、科学館・博物館職員、科学ジャーナリスト等の科学コミュニケーターが継続的に「ちきゅう」に乗船し、船上から生の研究現場、地球科学の魅力を伝えることの重要性を広くアピールしていきたい。